

第43回新潟内分泌代謝同好会

日 時 昭和60年7月6日(土)
午後2時開会
会 場 新潟厚生年金会館

一 般 演 題

1. 正常プロラクチン血症性無排卵症に対する CB 154 の投与効果

佐藤 芳昭・広橋 武 (新潟大学)
荒川 修・西村 満 (産婦人科)
丸山 晋司・阿久津 正
三宅 崇雄

dopamin が gonadotropin 分泌の調節因子として働いていることが明らかになりつつある。今回は高プロラクチン血症を併なわない無排卵症のうち、clomiphene citrate に反応しない症例に対して、dopamin agonist である CB 154 を投与して、その排卵誘発効果を見た。

対象は clomid の2段階投与で排卵のみられない正常プロラクチン血症31例であり、全て不妊を主訴とする無排卵性周期症12例、無月経Ⅰ度15例、Ⅱ度3例である。CB 154 による排卵誘発効果は、CB 154 単独で38.7%、clomid 併用で9.7%であり、無効は38.7%であった。前後の basal hormone 値では LH がより高い群には排卵しない傾向がみられた。

以上より CB 154 の投与は高プロラクチン血症でなくとも、その gonadotropin 分泌と pulsatility の改善に役立つようである。

2. クッシング病の1例

岩崎 洋一・奈良 芳則 (燕労災病院内科)
横山 元晴 (同 脳外科)

症例は44才の主婦。数年前より顔面の腫張に気付き近医で高血圧性心不全の治療を受けていたが改善せず、本年4月当科受診し Cushing 症候群の疑いで精査の為入院した。現症では著明な高血圧症と満月様顔貌を伴った中心性肥満を認めたものの皮膚線条や多毛傾向は無かった。一般検査成績では特記すべき異常なく糖負荷試験での血糖曲線は糖尿病型で、IRI は遅延高反応を示した。ホルモン検査では日内変動で午前8時の cortisol 26.7 μg/dl, ACTH 70.7 pg/ml, 午後10時の前者 18.1 μg/dl, 後者 32.3 pg/ml であった。尿中 17OHCS は基礎値が 10~23.5 mg/日で、8 mg/日の DXM 負荷でそれ

の約50%に抑制された。更に SU 試験では 52.5 mg/日と高反応を示した。その他 Lysine-vasopressin 10 μg 負荷に対して ACTH は有意に反応し、ACTH に対して cortisol は正常上限の反応を示した。副腎シンチは両側に集積した。画像診断上明瞭な下垂体腺腫は確認出来なかったが、新大脳外科での Hardy 手術により microadenoma が確認された。

3. Cushing 病9例の手術治療

黒木 瑞雄・田中 隆一 (新潟大学脳研究所)
横山 元晴 (脳神経外科)
谷 長行・伊藤 正毅 (新潟大学医学部
第一内科)
土屋 俊明・伊藤 寿介 (新潟大学歯学部
歯科放射線科)
宮澤 登 (竹田総合病院脳神
経外科)

経蝶形骨洞下垂体手術を施行した Cushing 病9例の経験から、診断および手術に関する問題点につき検討した。9例の内訳は女性5例、男性4例で平均年齢は34.1才であった。術前の内分泌検査では通常の Cushing 病と異なり ACTH が持続的低値を保つ例や、デキサメサゾン抑制試験で少量で抑制されたり、また大量でも抑制されない例がみられた。レ線学的検査ではトルコ鞍多断層撮影で4例に変化がみられ、CT では8例に腺腫を直接証明することが可能であった。そのうち microadenoma では6例中で5例が側方に偏在した。中に海綿静脈洞内に腺腫が存在した例があり、術前に腺腫の局在をできるだけ明確にしておくことが重要であると思われた。術後8例に高コルチゾール血症の改善が得られたが、腺腫の extensive resection を加えなかった1例が1年後に再発した。従って手術は腺腫境界部を含めた腺腫の切除が必要であると考えられた。

4. 腎不全を合併したアクロメガリイの3例

田崎 和之・鈴木 丈吉 (厚生連長岡中央)
小林 和夫・中山 康夫 (病院内科)

腎不全を合併した末端肥大症を、最近3例経験した。1例目は多発性のう胞腎による慢性腎不全。2例目は軽度の動脈硬化性及び糖尿病性変化のある所へ、脱水と高浸透圧性昏睡が加わったための腎前性腎不全。3例目は腎盂腎炎による1過性の急性腎不全と考えられた。末端肥大症の主要死因として腎不全はなく、また、同症で腎病変を合併するとの報告もないので、腎不全と末端肥大症の間に因果関係があるとは言えないと思われる。しかし、2例目は小脳出血と昏睡をおこして入院す

るまで末端肥大症とは気づかれず、3例目も高血圧で通院していたにもかかわらず、当科入院まで同症については発見されなかった。元来、末端肥大症というストレス状態にあった患者が、他病を合併したため、急激に全身状態が悪化し、腎不全をおこしてきたのではないかと考えられる。

5. 汎下垂体機能低下症を考えているが

LH-RH 試験 TRH 試験等に反応を

みた1症例

青柳 竜治・鈴木 文吉 (厚生連長岡中央)
小林 和夫・中山 康夫 (病院内科)

症例は32才女性。S 55 年第3子出産時大量出血あり。その後無月経、全身倦怠感、貧血が続く。S 58 年無菌性髄膜炎にて脳外入院。回復期より低 Na 血症続き、SIADH の診断のもとに水制限、デメクロサイクリン投与にて軽快。S 59 年にも同様のエピソードあり同様の治療にて軽快。今回 DM の治療のため入院。低 Na 血症起こしたため、下垂体機能検査行なったところ、ACTH, HGH の分泌低下。LH, FSH, PRL, TSH 反応正常という結果を得た。ハイドロコチゾル 20mg を開始したところ、全身状態良好となり、貧血の改善も認められた。低 Na 血症は ACTH 分泌不全に基づくと思われるが、GH については、ハイドロコチゾル投与後の変動についても興味を持たれるところであり、今後精査の予定である。

6. 妊娠32週目に見出されたクッシング症候群の1例

苅部 智子・田中 直史 (新潟市民病院内科)
山田 彬
中村 章 (同 泌尿器科)
大沢 哲雄・徳永 昭輝 (同 産婦人科)

症例：28才、女性。主訴：腰痛、高血圧、痤瘡、皮膚線条。家族歴：両親とも高血圧、既往歴：特記すべきことなし。現病歴：14才で初潮、以後月経順調。S 57 年夏より体重増加。S 58 年より顔面に痤瘡出現。同年暮れより月経不順。S 59 年2月結婚。5月に当院で妊娠6週と診断された。7月より腹部に皮膚線条、9月より歩行困難。10月に浮腫と高血圧で重症妊娠中毒症として入院。血圧180/120、低K血圧、胸腰椎に多発圧迫骨折あり、入院後ベッドにねたきりとなった。クッシング症候群の疑いで11/1 帝切(1840g, 32週)。内科転科精査で、血中コルチゾール増加、日内変動消失。尿中17-OHCS、尿中フリーコルチゾール増加。血漿 ACTH、尿中17-

KS は正常、デキサメサゾン抑制試験で抑制なくメトピロテストで反応なし。⁷⁵Se-selenonorcholesterol による副腎シンチで左側に集積像。腫瘍摘出し副腎腺腫と診断された。以上、妊娠32週で見出されたクッシング症候群の一例を報告した。

7. 糖尿病、狭心症として10年間治療された褐色細胞腫の1手術例

星山 真理 (金沢病院内科)
星山 金鉉 (同 外科)
中田 瑛浩 (富山医科大学 泌尿器科)

症例は56才の男性。主訴：動悸と胸部絞扼感。既往歴：胃下垂全剝術。家族歴：父脳出血、母高血圧。現病歴：41才頃から、多発的に息切れ、動悸、胸部絞扼感出現し、近医で高血圧、狭心症、糖尿病として加療を受けていた。58年3月下旬、易疲労と体重減少も加わったため、当院内科受診。著明なやせ、蒼白な顔貌、動揺性高血圧を認めた。内分泌機能検査で、尿アドレナリン 46~64μg/日、ノルアドレナリン 1,384μg/日の著増と腹部エコーで脾尾部から左腎上極に円形腫瘤を認め、腹部CT所見で左副腎腫瘍が疑われた。なお、甲状腺、副甲状腺機能に異常なく、甲状腺シンチでも異常を認めなかった。59年11月、左副腎より発生した234gの腫瘍を摘出した。術前、大量輸血とα-ブロッカー投与を行った。術中、術後の経過は順調で、現在、正常な社会生活を行なっている。血圧は130/80mmHg、尿カテコラミンは正常化している。

8. 尿中コチゾールと6β-OH コチゾール測定の検査診断的意義

中村 二郎・桜井 晃洋 (新潟大学 検査診断学)
屋形 稔

尿中コチゾールの測定は、コチゾール産生異常症のスクリーニングに優れた方法である。しかし、コチゾール過剰症の診断という観点から、なおいくつかの問題点が指摘されている。これらの問題点を補うために、尿中のコチゾールと6β-ヒドロキシコチゾールを同時に測定する方法を開発した。

本法を肥満症の4例に応用したところ、両測定値とも正常範囲にあった。

クッシング症候群の5例は異常高値を示した。このうち1例は、測定日によってコチゾールレベルは正常範囲にあったが、同時に測定した6β-ヒドロキシコチゾールは異常高値を示した。